

# 裏磐梯の文学

五色沼の遊歩道奥にある碑。昭和三十六年二十七回忌で子の義之助が建立。現夢は裏磐梯と大正九年（一九二〇）に命名。

遠藤現夢（十次郎） 歌碑

ながきよに みじかきいのち 五十年

ふんかおもへば 夢の世の中

元治元年（一八六四）会津若松市の新横町瀧口大右衛門の十二男として生まれ、ニューパレス前の遠藤米屋の養子となり、日新館跡の場所です。醤油醸造や運送等広く商売をしていました。明治四十一年に歩兵六十五連隊誘致記念として西若松から鶴ヶ城まで千本の桜を植林。後に土津神社に杉を植林。裏磐梯には、森林組合を結成し、大正九年トロッコ列車を猪苗代から小野川まで敷設し、松を植林しました。昭和十一年十二月六日、七十三歳で逝去。（昭和九年逝去もあり）

大正九年の森林組合申請書に初めて「裏磐梯」の名が登場します。現在の猪苗代からの国道四五九号は、軌道跡に昭和十年に造られた道路です。



裏磐梯高原ホテル、北側玄関前にある石碑



中山義秀（ぎしゅう） 詩碑

明治二十三年現白河市の大信村生まれ。早大英文科卒。早大で会津若松市東山温泉の生まれの横水利一と知り合い第七回芥川賞を受賞。十九歳の時、川上温泉の花見屋に泊まり、妻となる赤田敏との出会いを書いた「裏磐梯」に詩が収められています。昭和三十一年裏磐梯高原ホテル別館前に建てられ、昭和五十九年、現在地の玄関に移転されています。

「こは我等が思ひ出の宿なり なかば夢見心地の時ぞ送れる  
再来の日 ありやなしや よしありとも過ぎし日は返らじ  
かたみに交わす愛の唄 時に古ゆく哀しさよ」

水原秋桜子（しゅうおうし） 本名は水原豊（ゆたか） 句碑

明治二十五年（一八九二）十月九日東京都生まれ。東京帝国大学医学部卒。「洪柿」の松根東洋城や「ホトトギス」の高浜虚子に師事し俳句を学びます。昭和九年からは「馬酔木（あしび）」を主宰。昭和十年に裏磐梯に来ています。

「水漬（みづ）きつつ 新樹の楊（やなぎ） ましろなり」  
この句が五色沼入口に昭和十三年、野口英世の友人で県会議員・千里村長を歴任した磐鏡園（五色荘）主人秋山義次により建設されます。水原第一号の句碑。五色荘前には

「瑠璃沼に 瀧落ちきたり 瑠璃となる」  
がある。他に『蘆刈』に五句収められています。

J・A・生協誕生秘話、参考にした小説の舞台、「楽土は桧原」

『乳と蜜の流る々郷』は「家の光」に賀川豊彦が、昭和九年一月号から同十年十二月号に至るまで、二十四回にわたって連載されます。友愛に基づく共同組合を目指した物語で、助け合いによって農村の活力を復活するものです。北塩原村の大塩が舞台となり最後に「桧原湖畔に楽土（楽園）が現れたのである」と締めくくられています。

賀川豊彦は、日本で最初ノーベル平和賞と文学賞の候補となったキリスト教徒、政治家。一八八八年（明治二十一年）七月十日（戸籍では十二日）賀川純一と益栄（本名菅生かめ）の次男として神戸に生まれ、一九六〇年（昭和三十五年）四月二十三日 七十一歳で死去。東京都世田谷区に賀川豊彦記念松沢資料館があります。

この小説は、全国で読まれたベストセラーで、この小説をもとに農業協同組合、生協、共済組合、労金、信用組合などが誕生したのです。

